

2024 年度 東京医科大学 医学部医学科
一般選抜・共通テスト利用選抜

小 論 文

受験番号					フリガナ	
					氏 名	

I. 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子は開いてはいけません。
2. 試験開始後、頁の落丁・乱丁および印刷不鮮明、また解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 試験終了後、解答用紙を回収します。
4. この課題は持ち帰ることができます。ただし、試験終了後、監督者の指示があるまでかばんの中等にしまうことはできません。
5. 監督者の指示に従い、課題及び解答用紙の「受験番号」・「氏名」欄に正しく記入してください。

II. 下記の文章を読み解答してください。

1. 試験時間 : 60分
2. 課題 : 日本語の課題 1 題
3. 解答の仕方 : 解答用紙に記入してください。

下記の文章は、研究者であり看護師でもあった著者が、精神病院で当時「痴呆専門病棟」と呼ばれていた病棟（2004年以降は認知症専門病棟に改称されている）に入院していた長崎さん（女性）と松田さん（男性）の様子を書きとったものです。受験生のみなさんは、人と物、あるいは、物と物が区別できることを当然のこととして生活しています。しかし、ここに登場する長崎さんのように、認知症の症状が進行するなかでそのような区別がだんだんと難しくなってゆく方もいます。

【問題】

下記の文章を読んだうえで、私たちの社会でみなさんのような状態から何年もかけて長崎さんのような状態になってゆくとすれば、そこに至るまでにどのような悩みや苦しみを経験するか考え、次の①～③の3点に触れながら600字以内で述べてください。（*考えた事柄が必ずしも医学的に正確である必要はありません。あなたがこれまでに学んだこと、経験したこと、考えたことを活かして以下の点を考えてください。）

- ① 私たちは、人と物、または物と物をどうやって区別しているのだろうか。
- ② 人と物、または物と物を区別できなくなってゆく過程では、どのような困難や苦しみを経験してゆくのだろうか。
- ③ そのような困難や苦しきは、私たちの社会の状況といかに関連しているのだろうか。

長崎さんは、手を取り合うだけではなく、物や他者、そして自分にもよくさわる人である。たとえば、こんな具合である。

以前チラリと登場してもらった松田さんをご記憶だろうか。彼は足が不自由なため車椅子にのっていることが多い。耳が遠いこともあって、ダイルールのテレビの真向かいが彼のお気に入りの場所である。威厳だけでなく、なんとなく孤高な雰囲気漂わせてもいる。

その松田さんの車椅子の車輪を頻繁にさわるのが長崎さんである。それも「あれ～、……で……で困った、困った」、「どうして……で、いけない……」とブツブツ独り言をしながら、車椅子のスポーク（注）を左右に振ってみたり、タイヤの表面から何かを剥はぐ動作をする。そのうち、さわる部分はだんだん上に向かっていき、木製の「手もたれ」へと行き着く。もちろん「手もたれ」には松田さんの手が載せられてある。長崎さんは、先ほどと同じトーンの独り言をしながら松田さんの手へと、さわる対象を移していくのである。「あれ～、……で、だめだ」とか「これ、……で、ね、ね、それで、それで……」と、認知症の人々によくある感嘆詞や接続詞、代名詞、語尾のくりかえしに占領されたフレーズのパレードである。

何よりも驚きだったのは、松田さんという「人間の手」を、いままでさわっていた車椅子という「物」とまったく同質であるかのごとくさわることであった。長崎さんのさわりに、物と人の違いを感じ取ることができなかつたのである。顔の表情も同じ困り顔であるし、独り言も同じ調子、そしてスポークと同じように松田さんの指の一本一本を左右に動かし、手

の甲を上を持ち上げ、手のひらをのぞき込む。そこにはいままで人として生き、働いてきた松田さんの手のひらのしわが刻まれているのに、いったい長崎さんは、そこに何を見ているのだろうか。生命線の長さを見ているわけではあるまい。長崎さんがさわっているのは紛れもない生物体としての人間の手なのである。

長崎さんのさわる行為はそれで終了するわけではない。今度は、松田さんの手から腕へ、そしてその先にある顔へ、上へ上へと昇っていく。そして耳や鼻や唇をまさぐる。物の延長線のごとく人間にさわれるものであろうか。もちろん、長崎さんは自分で勝手に物にさわっているのであるからいいにしても、松田さんはたまったものではない。眉間にしわを寄せ、最初はじっと忍耐の人であるが、被害が顔にまで及ぶ頃になると一喝する。「こら！」と、それはそれは大きな声で叱責する。その声に長崎さん少しは驚いたように「わっ、……で」、「何だがさ……」と言い残してその場から消えることになる。単に視力に問題があるとか、勘違いしているわけではない。

(阿保順子『認知症の人々が創造する世界』より一部改変)

(注) 車輪とその軸を結んでいる棒状の部品。